世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

国語に関する意識の変容についての一考察

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2018-03-14
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 山﨑, 淳
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/738

国語に関する意識の変容についての一考察

A Study of the Transition of the Awareness
about Japanese Language

山　﨑　　淳*
YAMAZAKI Atsushi

1　研究の目的

文化庁では、毎年「国語に関する世論調査」を実施しており、その調査結果のうち、関心が高いと思われる事項については新聞等のメディアを通じて広く国民に知らされている。文化庁によると、その調査目的は「文化庁が平成7年度から実施しているもので、日本人の国語に関する意識や理解の現状について調査し、国語施策の立案に資するとともに、国民の国語に関する興味・関心を喚起する。」とある。20年以上にわたって実施されてきた本調査の中には、何年かぶりに同じ質問項目を設定し、経年変化を見るものがある。この質問項目に着目し、言葉や言葉の遣い方に対する意識の変容について探っていくこととする。また、「言葉は生き物」と言われることもあるが、長年にわたって人口に膾炙しているうちに、言葉の意味が変わってしまったり誤用が浸透してしまったりということも珍しくない。本調査の結果を基に、言葉の遣い方の変容についても考えていきたい。

考察対象は、平成29年9月21日に公表された、「平成28年度『国語に関する世論調査』」の結果である。

2　国語に関する意識の変容

(1) 意見の表明や議論などについての意識

①　(a) 自分の考えや意見を積極的に表現する方だ。
　　(b) 自分の考えや意見を表現することには消極的な方だ。

	(a) に当てはまると思う	(b) に当てはまると思う	場合によると思う	分からない
平成28年度	43.1	41.9	14.8	0.1
平成20年度	37.8	35.1	26.7	0.5
平成 9 年度	40.1	35.1	24.3	0.5

（表中の数字は、百分率を表す。以下同じ。）

*武蔵野大学教育学部

過去の調査結果と比較して大きな特徴と言えるのは、「場合によると思う」の減少である。このことから、自分の考えや意見を積極的に表現するかどうかは場合によるのではなく、あらかじめ自分のスタンスとして確立している人が増えたということが言える。その場の状況や雰囲気にかかわらず、積極的に意見を言いたい人は言うし、そうではない人は言わずに済ませているということである。意見を表明することについての自覚や意識が確立している人が多いと言える。平成20年度の調査と比較すると、積極的に表現する人も表現することに消極的な人も、それぞれ6ポイント程度増加している。この点について、これまで国語科教育に携わり、様々な言語活動を通して子どもたちのコミュニケーション能力や伝え合う力の向上を目指してきた者にとっては、きわめて意外に感じられる。調査対象が16歳以上の方であるということを勘案しても、最近の学校教育を受けてきた人もいるはずであり、表現することに消極的な人の増加については、忸怩たる思いである。今後、言語活動の改善を図る必要を感じる。

② (a) 人と意見が食い違っているときには、納得がいくまで議論したい方だ。
(b) 人と意見が食い違っているときには、なるべく事を荒立てないで収めたい方だ。

	(a) に当てはまると思う	(b) に当てはまると思う	場合によると思う	分からない
平成28年度	24.9	61.7	13.3	0.1
平成20年度	23.2	51.3	24.9	0.6
平成 9 年度	27.1	50.7	21.9	0.4

この調査結果の大きな特徴は、①と同じように「場合によると思う」の大幅な減少とともに、「(b) に当てはまると思う」の大幅な増加である。まず言えるのは、①と同じように、その場の状況や雰囲気によって納得がいくまで議論するのかどうかを決めるのではなく、あらかじめ態度を決めている（性向が決まっている）人が増加したと見られる。しかも、「場合によると思う」人の減少分がほぼそのまま「(b) に当てはまると思う」人の増加につながっていると考えられる。「(b) に当てはまると思う」は、「(a) に当てはまると思う」の約2.5倍にもなっている。最近「空気を読む」風潮が強くなってきたと言われるが、この調査結果にも表れていると言える。

③ (a) 人に話をするときには、筋道を立てて分かりやすく話すことを心掛ける方だ。
(b) 人に話をするときには、相手の気持ちになじむように、やわらかく話すことを心掛ける方だ。

	(a) に当てはまると思う	(b) に当てはまると思う	場合によると思う	分からない
平成28年度	41.0	47.7	11.0	0.2
平成20年度	33.9	43.2	21.8	1.1
平成 9 年度	40.7	41.6	16.3	1.4

この調査結果においても、「場合によると思う」が大きく減少している。減少分は、「(a)

に当てはまると思う」と「(b) に当てはまると思う」に振り分けられているような状況であるが、過去の調査と同様、「(b) に当てはまると思う」の方が多くなっている。最近、グローバル化が叫ばれ、外国の方とコミュニケーションをとる際は、婉曲な言い方よりも直截的・論理的な言い方の方がよいとの考え方もあるが、「(b) に当てはまると思う」人の方が多いということは、論理よりも相手の受け止め方を大事にしている方が多いということであろう。実際、日常生活においても、正しいことを言っているのに反発を買うということはよく見られる。「物も言いようで角が立つ」という諺もある。自分が伝えたいことを相手が受け入れてくれるように配慮しながら話すということは、どのような世の中であっても極めて大切なことであると思われる。

(2) これからの時代、必要だと思う言葉に関わる知識・能力

	平成28年度	平成14年度
説明したり発表したりする能力	20.7	17.7
相手や場面を認識する能力	18.9	7.4
論理的に考える能力	10.7	7.9
分析して要点をつかむ能力	9.8	6.5
言葉で人間関係を形成しようとする意欲	9.1	12.2
考えをまとめ文章を構成する能力	7.5	12.2
敬語等の知識	6.5	11.2
日本の伝統的な文化やものの見方	4.8	4.7
漢字や仮名遣い等の文字や表記の知識	3.4	9.5
必要なものは特にない	2.6	2.0
語句や慣用句等の知識	1.2	2.6

平成14年度の調査結果と比較して増えているのは、「相手や場面を認識する能力」(11.5ポイント増)、「分析して要点をつかむ能力」(3.3ポイント増)、「説明したり発表したりする能力」(3ポイント増)、「論理的に考える能力」(2.8ポイント増) などである。逆に、減っているのは、「漢字や仮名遣い等の文字や表記の知識」(6.1ポイント減)、「考えをまとめ文章を構成する能力」(4.7ポイント減)、「敬語等の知識」(4.7ポイント減)、「言葉で人間関係を形成しようとする意欲」(3.1ポイント減) などである。携帯電話、スマートフォン等の電子通信機器の発達により、まとまった文章を読んだり書いたりする機会が大きく減少したことの影響により、「漢字や仮名遣い等の文字や表記の知識」や「考えをまとめ文章を構成する能力」の必要性が希薄になったと考えられる。文章を書くということは思考を深めることに直結するため、このような状況は由々しき事態であると言わざるを得ない。また、「相手や場面を認識する能力」が増加したのは、前述した「空気を読む」といった風潮が影響しているものと思われるが、一方で、「言葉で人間関係を形成しようとする意欲」が減少しているのは、腑に落ちないことである。その場の空気は読むが、積極的に人間関係を深める意欲はないということであろうか。お互いに深く関わる関係にはならず、その場をそつなく何事もなく過ごせばよいといった考えをもつ人が増えているのかもしれない。この他、「分析して要点をつかむ能力」、「説明したり発表したりする能

力」、「論理的に考える能力」が増えているのは、プレゼンテーションの必要性や重要性が高まっていることによるものと思われる。

(3) 具体的な場面における言葉遣い

① 人に贈物をするときには、「つまらないものですが」などと謙遜する。

	する	しない	場合によると思う	分からない
平成28年度	46.9	25.1	27.8	0.1
平成20年度	50.8	26.8	21.9	0.6
平成 9 年度	51.4	26.0	22.0	0.5

この「(3) 具体的な場面における言葉遣い」の調査結果の大きな特徴は、②~④までの結果を含め、「(1) 意見の表明や議論などについての意識」の調査結果と対照的に、「場合によると思う」の回答が増加していることである。意見を表明することに関しては、あらかじめスタンスを明確に持ち、その場の雰囲気に流されない人が増加したのに対し、言葉遣いに関しては、その場の雰囲気を重視する人が増加したということであろうか。

①の調査では、前回の結果に比べ「場合によると思う」が約6ポイント増加したため、「する」が約4ポイント減、「しない」が約2ポイント減となっている。したがって、全体の中での「する」人と「しない」人の割合は大きく変わってはいない。

② 人に贈物をするときには、「苦労して選びました」「とてもおいしいんですよ」などと、その物のよさを表す言葉を添える。

	する	しない	場合によると思う	分からない
平成28年度	15.5	56.3	28.0	0.2
平成20年度	23.7	50.5	25.3	0.5
平成 9 年度	18.4	57.9	22.9	0.8

この調査でも、「場合によると思う」の増加が見られるが、①の調査と異なり、「する」が大きく減少し「しない」が増加している。平成20年度の頃は、おいしいものを「おいしい」と正直に言うことは、卑屈さがなくむしろ潔いという風潮があったと思われる。ところが最近は、自慢するという言動に嫌悪感を持たれてしまうようである。「苦労して選びました」や「おいしいんですよ」は必ずしも自慢している言葉ではないが、そう受け取られることを避ける気持ちがこの数字に表れているようである。

③ 会議などで提案をするときには、「もし皆さんがよろしかったら…したいと思いますが」などと言い、自分を強く出さないようにする。

	する	しない	場合によると思う	分からない
平成28年度	49.8	16.1	31.3	2.7
平成20年度	51.5	17.3	28.0	3.1
平成 9 年度	47.6	20.3	26.9	5.2

この調査でも、「場合によると思う」の増加が見られ、その分「する」と「しない」が減

少している。「する」と「しない」の割合についての傾向は、平成20年度の調査と大きく変わってはいない。

④　会議などで提案をするときには、「私はこうすべきだと思います」などと、自分の考えをはっきり言う。

	する	しない	場合によると思う	分からない
平成28年度	29.6	20.3	47.4	2.7
平成20年度	31.3	23.7	41.9	3.1
平成 9 年度	33.7	27.0	35.2	4.1

この調査でも、③と同様「場合によると思う」の増加が見られ、その分「する」と「しない」が減少している。「する」と「しない」の割合についての傾向は、平成20年度の調査と大きく変わってはいない。③の調査での「はい」と④の調査での「はい」を比較すると、③の方が高い数字であることから、自分の考えをはっきり言う人より周囲に配慮した言動をする人の方が、これまでも現在も多いことが分かる。

3　言葉の遣い方の変容

本調査では、「気になる言い方か」という問い方で、過去と同じ質問が4項目あるが、紙幅の関係で特徴的な二つを取り上げてみたい。

①　うそをついてあとで後悔した。

	気になる	気にならない	どちらとも言えない	分からない
平成28年度	49.5	46.6	2.7	1.2
平成17年度	41.2	54.4	2.7	1.7

この調査は、重言の適否を問うている。平成17年度に比べて「気になる」が大幅に増加している。私が担当している授業で、「身の回りのおかしな日本語」について学生に聞いたところ、「一番最初」や「頭痛が痛い」、「違和感を感じる」などの重言を取り上げた者が多かった。普段から気にしている人が多いと思われる。

②　今年の元旦の夜は、みんなで初詣に行こうよ。

	気になる	気にならない	どちらとも言えない	分からない
平成28年度	43.1	51.7	3.6	1.6
平成17年度	53.2	40.8	3.1	2.9

この調査は、言葉の意味をしっかり理解しているかを問うている。元旦とは元日の朝のことであるが、「気になる」の減少と「気にならない」の増加から、元旦の言葉の意味を間違えて捉えている人が増えているようである。学校教育において語彙指導の充実を図ることが

求められる。

４　まとめ

社会の情報化、グローバル化が叫ばれる中で、自分の考えをはっきり言うことが重要であるとの論調が強くなっているが、本調査の結果を見ると、私たちの意識の中では意見をはっきり言うことよりも人間関係を壊さないことを重視していることが窺われる。それは決して悪いことではないが、思っててはいても意見を言わずに我慢をするのではなくて、相手の気分を害さずに自分の考えを言うという技能が必要なのではないかと思う。本研究を基に、具体的な方策を今後考えていきたい。

参考文献

文化庁「平成28年度『国語に関する世論調査』の結果の概要」